国際協力最前線

第146回

「いつか一歩を踏み出すために」

手工芸・片岡美加

ノンタブリー人身取引被害者保護福祉センター、通称バンケッタカンはノンタブリー県のチャオプラヤ川の中州のクレット島にある。人身取引被害者の保護をしている施設で、女性被害者に衣食住の提供、職業訓練を行い、社会復帰を目指している。全寮制で主に性的搾取の被害に遭い、心身に傷を負った女性約150人が在籍しており、18歳以下の生徒が80％以上を占める。私は青年海外協力隊の手工芸隊員として派遣され、入所者に対し手工芸などの活動を通じてセラピーをしている。

◇人身取引の背景に日本

「人身取引」という言葉に驚いたのは青年海外協力隊の募集要項を見た時のことだった。何度か旅行で訪れていたタイでそのようなことが行われていることに衝撃を受けた。調べる中で、タイにいる外国人だけでなく日本人も関与していることも知った。騙されて日本で売春を強いられる性的搾取被害い保護されるタイ女性も多く、何かできないかと関心を持った。

七夕の飾りをする生徒たち

タイに派遣され配属先で感じたことは生徒の多くは普通の女の子と変わらないということ。笑顔で挨拶をし、きれいなものが大好きで、日本に興味があって人懐っこく話しかけてくる。表面的には本当に被害者なのかと疑うほどに普通のタイ人女性なのだ。

13歳以上の生徒が保護された時、最初の2～3カ月は初期入所室という部屋で過ごすのだが、入所したばかりの生徒は皆「家に帰りたい」と言う。

バンケッタカンでは規則正しい生活をすることで心身を癒やすことを目的としている。この規則正しい生活が生徒にとっては厳しいようだ。私は初期入所室で手工芸を教えている。作業などを通じてセラピーをすることがここでの私の活動である。ただ私には手工芸の知識はあるが、セラピーとしての効果や心の動きなどに関しては全くの無知である。手工芸で完成したものに価値があるかどうかの結果を見るのではなく、作る過程に生徒自身の心身を癒やす効果があるというのでやってみることになった。

◇セラピーをするということ

手工芸の技術を教えることが活動だと思っていた私にとってどういった活動がセラピーになるのか、効果的なのか悩む日が続いた。私は目には見えない被害者の心理状態、ケアの方法などは一切分からない。けれど一つ決めたことがあった。それは、現時点で彼女たちに将来の明確な目標や計画がなかったとしても、これからの人生を前向きに考えるきっかけになる活動をする、ということだ。今は無理でもいつか自分の力や意思で自分自身の将来を考えることができたらと考えた。

それでも入所したばかりの生徒にとって積極的に授業を受けることは簡単ではない。授業を受ける状態ではない生徒、やってみる前からできないと尻込みする生徒。感じたのは作品づくりを「やってみる」ということ自体へのハードルが高いということだ。工夫もしてみた。どんなことに興味があるのか、経験として将来に生かせそうなこと、生徒の技量を見ながらできそうなもの、達成感を得られるものを考えた。

◇彼女たちの将来のために

「人身取引」で被った彼女たちの心身の傷に対して私ができることは無に等しい。けれど自分で作った作品を見る生徒たちの表情が明るくなるたびにその成長を感じている。そしてそれが私自身の活動をより良くしたいという原動力になっている。彼女たちが活動を通して多くの「できる経験」を重ねて、退所後、その経験が辛い過去を乗り越え、勇気を持って何かに挑戦できる一助となることを願っている。

【筆者紹介】片岡美加（かたおかみか）　２０１７年３月に青年海外協力隊の手工芸隊員としてタイに赴任。ノンタブリー人身取引被害者保護福祉センター勤務。兵庫県出身。